

歯科技工は「患者さんの人生を担う」師・村岡博氏の教え

interview

歯科技工の「後世に道を」都技会長の展望



東京都歯科技工士会 会長
石川 功和

石川 功和(いしかわ・よしかず) 1952年11月11日生まれ、74年3月に日本大学歯学部附属歯科技工専門学校を卒業。74年4月から村岡歯科勤務、93年9月に退職。翌10月、IACを開業し現在に至る。17年6月に東京都歯科技工士会会長・日本歯科審美学会副理事長および22年6月に日本歯科技工学会会長・日本歯科技工士会常務理事に就任した。

2017年に東京都歯科技工士会会長、2022年に日本歯科技工学会会長に就任した石川功和氏。高校生時代はデザイナーを志したものの、歯科医療の現在と将来を真剣に考え、実践していたことが現在でも語り継がれている故・村岡博氏と出会い、歯科技工の道を歩むこととなる。村岡氏のもと、歯科医療の素晴らしさを学んだという石川氏は現在、歯科技工業界が直面する歯科技工士の減少や高齢化などをはじめとする課題解決に正面から取り組み、「後世に道を示したい」と意気込む。今回は、当会の早坂美都副会長が歯科技工業界の展望を中心に話を聞いた。

「歯科技工士を目指したきっかけは？」

私の学生時代は、手に職を付けたという風潮があり、自分も進路としてデザイナーや美術系の分野を考えていました。しかし、門戸が狭く厳しいと感じていたところ、知り合いの歯科医師から歯科技工士という職業を教えてくださいました。手に職が付き、いい仕事だと言われ、歯科技工士を目指しました。最初に勤務した診療所で、歯科医療の発展に大きく貢献した村岡先生と出会い、歯科医療の素晴らしさを教えられました。歯科医師と歯科技工士はチームにならないといけないという志を持った先生の影響で、だんだんと仕事が面白く感じられるようになっていきました。また、歯科技工は技工物を作るだけではなく、自ら考える部分も多くあり、魅力を感じ、自分に合っているなと思っていました。最初の頃は、技工物を作るよりもその準備をする仕事メインでしたが、少しずつ患者さんの技工物を作らせてもらえるようになり、徐々に充実していききましたね。

「東京都歯科技工士会の会長、さらに日本歯科技工学会の会長に就任しましたが、変化はありますか。」

「技工士会」は歯科技工の質の確保や向上に関する事業の推進などがメインですが、「技工学会」はアカデミックで、歯科医療の向上に寄与

かつてのブラックさを払拭へ

「人手不足や高齢化など、業界を取り巻く状況が変わっていると思います。」

歯科技工の分野では、デジタル化が進めば人手不足をカバーできると考えています。高齢化についても我々の世代は一人前になるまでは5〜10年かかると言われていたのですが、現在はデジタル化、機械化などで早く立ち立できる環境になりつつあります。働き方自体も昔とは違ってきていると言えますね。

「早々に独立できる環境にあるのですか。」

現状では、開業している人の7〜8割ほどが一人で技工所を営む、いわゆる「一人ラボ」ですが、これからは開業することが難しくなってくるのではないかと思います。かつては比較的容易に開業できましたが、デジタル化が進むにつれ、機器の導入、ランニングコストなどを考えると、一人ラボの経営は難しい部分があります。ある程度の規模がなければ最新の機器を揃えることができません。昔は朝早くから夜遅くまで作業しつつ、合間に配達に行くという生活で、週に1、2回しか家に帰れないことも当たり前のようでしたが、世の中の働き方が変わる中で、歯科技工業界だけが変わらないというわけにはいきません。大手ラボも働き手を集めるべく、まずは福利厚生を整える傾向にあります。

「かつてはブラックな業種というイメージもあつたかと思えます。」

し、歯科技工の発展を図る組織です。私は日本歯科技工士会(以下、日技)の常務理事も務めています。日技が行政や社会に働きかけるのに対して、東京都歯科技工士会をはじめとした、地域会の役割は、地域の歯科技工士の声を日技へ届けることだと思っています。

「過去には、在籍3年以内の離職率が7〜8割と言われた時期があり、ブラック業種のイメージもあつたと思えますが、今はそこまでではないです。企業も就労環境を整えないといけないので、デジタル化とうまくマッチングして働きやすい環境を実現している部分もあります。特に、大手のラボでは昔のようなブラックさはないのではないのでしょうか。」

「歯科技工所の経営にあたる課題は。」

中堅〜大手のラボは仕入れ額や、必要な従業員の数を当然考えますが、一人ラボは自分の人件費だけを考え、足りなければ働けば良いと、それで蓋を開けてみたら「これだけしか利益がないのか」という状態に陥るのです。高校を卒業して技工学校に入学するパターンが多く、授業では経営に関する科目はないため、開業の前に経営の勉強をする人は多くありません。経営的な知識を技工士会が提供していくことも今後の課題です。また、一人ラボはどうしても周囲の環境に依存してしまう傾向がありますが、歯科技工士自身は少なからず能動的に知識を習得する必要があります。歯科技工士は自分の息が技工所を継ぐことが少ないですが、我々が踏ん張って業界を良くし、この道を後世に示す努力をしていかなければなりません。

歯科医師とのチームプレーが不可欠

「歯科医師との関係性について、石川会長はどのように見えていますか。」

歯科技工士は歯科医師の先生から仕事を受注します。その中で、先生に何とかしてもらおうという意識ではなく、対等な立場に立つべきだと思います。コストの上昇などで値上げしなければならぬ時に、十分な説明と何か付加価値を付けて理解を求めて値上げすることは何ら問題ではなく、当然のことだと思います。歯科技工士からは「仕事がなくなるのでは」という不安の声を聞きます。しかし、そこは取引としてしっかりと交渉することが大事です。今までは周りと足並みを揃えていた部分がありましたが、定価の根拠を示し、先生たちと対等に話をすべきだと思います。

「当院では歯科技工士さんが納品に来た時に患者さんがいる場合は、「こちらの方が作ってくれた技工物です」と紹介するようにしています。とても素晴らしいと思います。そうした時にしっかりと挨拶ができ、先生や患者さんとコミュニケーションを取れるようにしていくべきだと思います。例えば技工物を緩衝材に包み納品するなど、単純に技工物を作るだけではなく、その他の気配りが重要だと思います。かつて村岡先生は、「自分は何をする立場なのか」ということを考えて行動してほしいと、よく言っていました。」

「歯科医師とのコミュニケーションが課題だと感じているのですか。」

「コミュニケーションの課題は改善、向上させていくべき事項の一つです。例えば、良い歌手、作詞作曲家、さらに曲をアレンジする人がいて、初めて良い曲ができます。歯科医師が印象を採って、患者さんに技工物を入れる時、我々が付加価値を付けて、先生に「こうしたらもっと良くなります」と提案して、患者さんから良い反応を得られれば、我々の仕事の価値が上がります。そうしたチームプレーで、先生方が提供する医療をより良いものにしていく必要があります。」

門学校等は、全国に70校ほどあったものの、今は47校です。年間の入学者数は、かつては2千人ほどいましたが、今では780人程度にまで減っています。歯科技工士のことを知っている高校生は4割ほどで、進路の選択肢に入っていないのが現実です。歯科技工士会として職業の認知度を上げる努力をしなければなりません。ただ単に、「素晴らしい職業である」「歯科技工をなくしてはいけない」という歯科技工士の方がいらつしゃいますが、ロマンだけではやっていけません。歯科技工士になれば「こんなビジョン、将来がある」という具体的なことを示さないといけません。

「歯科技工に関する思い出を。」

歯科技工士としての人生を振り返ると、やはり村岡先生の存在が大きかったです。患者に対して何がベストなのか常に考えている先生でした。先生からは歯科医師の一方的な考えではなく、技工サイドからの意見を求められることもあり、対等に接してくれていたのが、そうした経験は大きなものでした。それともう一つは、「歯がないと物を食べられないんだよ」と、歯の重要性を説いてくれました。医療における理念や哲学を、一から教えてくれたのが村岡先生です。歯科技工は単に物づくりではなく歯科学であり、さらに人の人生や生活を担っているということを思いながら仕事をしています。

「最後に座右の銘を教えてください。」

今、茶道を習っているのですが、座右の銘は「日日は好日」です。1日を大事にし、いい日も悪い日もあり今この時が大切なのだということ。お茶だけではなく、いろいろなことにつながると思っています。

「本日はありがとうございました。」



▲東京都歯科技工士会の事務所には
▼講習会などをWEB配信するための設備が整う

